

(佐々木注) 1998年10月17日作成

## 「潜水艦幹部に対する講和」

### 原題 「潜艦隊講話」

原文 B5版 14 ページ。

原文をそのままに A4 版に変換し、欄外にページを付与したもの

#### 潜水艦隊幹部に対する講話

10-10-21

久しぶりに元気な潜水艦の皆さんにお目にかかって話をする機会を与えられ、大変有難く思う。これは半分ホンネ、半分外交辞令である。後輩の皆さん特に潜水艦の方々が大いに活躍している姿に接するのは何より嬉しいことであるが、私はもともと話をするのは苦手な上、退職後既に21年、1潜群司令の当時から数えると30年、この変化の激しい世の中で、世代の大きく違った皆さんが、何を考え何に悩んでいるかも判らなくなった人間である。こういう人間が、もっともらしい顔で話をしても、貴重な皆さんの時間を無駄にするだけではないかと思って話の方は全く気が進まなかったというのが、率直なところである。そうはいうものの、因縁浅からず、弟のように思っている三成司令官から声をかけられると、むげに断ることも出来ず、ノコノコやってきた次第で、これが外交辞令たる所以である。

何を話すべきかについても迷ったが、二次大戦以後の各種戦争や紛争について、私が強い感銘を受けたもののなかから若干を取上げ、今日でも通用すると思われる教訓を中心に話をすれば、多少でも今後の皆さんの勤務の参考になろうかと考えた次第である。

先日テレビで、マクナマラ元米国防長官を始めとする十何名かの米人が、同数のベトナム人と何故ベトナム戦争をやらなければならなかったか、戦争回避の方法、もっと早く止める方法はなかったかなどについて討議した模様が放送されていた。マクナマラ氏は近年回想録を発表し、ドミノ理論、即ち南ベトナムが共産化すれば、東南アジア一帯が次々と共産化されるから、どうしてもここで阻止せねばならないという目的で戦争に踏切ったが、今日から考えてみるとそれは間違っていた、ベトナム戦争はやらなくてもよかった戦争であった、と述べたそうである。これが発表されると、5万何千人からの米兵は、いったい何のために死んだのかと、新しく論争を招いた旨が伝えられた。(私はまだ其の回想録を読んでいないので、これはテレビや新聞からのまた聞き知識である)。そこでこのベトナム側との討議は、間違っていたのは、米側だけではなくて、ベトナム側も過ちを犯したということ、何とか相手にいわせようとする米側の態度が、見え見えのように私には思われた。

私にいわせれば、そんなことをやらなくとも、戦争というものは、両方が間違っていたから起きるのが当然であって、一人では喧嘩の出来ないのと同じことである。東京裁判や今日の自虐史観では、日本だけが悪くて大東亜戦争が起きたようなことをいうが、そんなことは絶対にあり得ない。それと同じくベトナム戦争も米国だけが過ちを犯したのではなくて、双方がお互いに相手の張る限度線を踏越えたからこそ戦争になったのであり、その間に相互の意志疎通が十分でなく、相手の意図を誤

解したことが、戦争の開始や拡大、そして早期解決の失敗に結びついたものと思う。

日本の観念的平和論者のいう如く、平和平和とお題目を唱えていれば戦争にならないというものではないことは、いまさら皆さんに申すまでもない。人間にはかってフォークランド紛争の時にサッチャー首相がWE SEEK PEACE WITH FREEDOM、NOT PEACE AT THE EXPENSE OF FREEDOM と叫んで、全英国国民の共感を得たように、時には平和を犠牲にしても守らなければならない価値があり、その為に戦うものである。ベトナム戦争の時には、ベトナム側は独立と自由、米側は自由民主主義を守るための共産圏の拡大阻止というのが、それぞれの守らなければならない価値であった。其の対立が、平和のうちに解決できないときには実力を以て主張の貫徹を図る、これが人間の現実であり、宿命とも言えよう。

ところで私が最初にこの問題を取上げたのは、皆さんには分り切ったこういうことを強調するためではなくて、戦争目的の曖昧さということを浮び上がらせるためである。皆さんは、作戦要務で目標の原則ということを学んで、十分に身につけていると思うが、さてどうであろうか。現場の指揮官は、与えられた任務を達成するために最善を尽すのであるが、それは、そのことによって上級指揮官の任務達成に寄与するためである。こうして全指揮組織を通じて、それぞれが上級指揮官の任務達成に寄与し、総合して、戦争目的達成に向けて全部隊の努力が一貫して指向されるわけであるが、其の大本の戦争目的が間違っていたり、曖昧であったのでは、戦争に勝てるはずがない。

1965年から1972年の間にベトナムで指揮官の地位にあった陸軍の将官173名の生存者に対し、ベトナム戦争の目的に関して60項目の質問をして調査した結果判明した事実は次の通であった。

米国のベトナムにおける目標を明確に理解していた人は29%

そうあるべきほどは明らかでなかった人が33%、不明確で戦争が進むに従い再考を必要とした人が35%

つまり戦争を実施した将軍の殆ど70%が其の目標について不確実の儘戦ったのが実態であった。

このことから、1. 政策作成者が明白な到達しうる目標を形作る能力を欠いたという根深い戦略的失敗、2. WAR COLLEGEや多くの教育を受けた将軍達が、何が目的であるかを知らずに戦い、しかも其の責めを上司に負わせた事実、が浮び上がった。我々はこれを深く反省し、教訓を学び取らねばならない。これがこの調査の結論であるが、わが海上自衛隊では、果してどうであろうか。

日本海軍では、任務とか協同、意志の疎通、上司の意図の明示などは強調されたが、目標系列とか、使命即ち任務だけでなく其の目的をしっかりと認識するという考え方は全くなかった。つまり協同にせよ、意志の疎通にせよ、其の中核となるべき目標系列を通じて、努力の指向を一貫するという着意はなかったのである。其の結果とも言えようか、大東亜戦争の多くの海戦に於てこの目的観念の不在或は目的の不一致などが、作戦失敗の大きい原因となっているように思われる。今日は時間もないので具体的な内容は省略するが、ハワイ攻撃で南雲部隊が第二撃を行わなかったこと、ミッドウエー海戦における南雲部隊の失敗、第一次ソロモン海戦で、三川部隊が警戒部隊の撃破に満足して敵上陸船団に一指も触れなかったこと、レイテにおける栗田部隊の反転などは良い例と思うので、興味のある人の研究を奨めたい。

海上自衛隊の平時の業務でも同じである。総ての規則や慣習には、そう規定するこ

とによって、何かを達成しようとする目的があるはずである。しかし時間が経つにつれ、その目的が忘れ去られ、規則のための規則、慣習のための慣習になってしまったものも、少なくないのではなかろうか。総ての業務には、それを遂行することによって海上自衛隊全体の任務達成に寄与すべき目的なり目標があるはずであり、其れが無いものももしあるとすれば、其れこそ無用の仕事ということになる。平時には、規則や慣習、上司の細部までにわたる指示などに従って居れば、大きい問題を起すことはないかもしれないが、有事にはそうはいかない。特に単独で行動する潜水艦長は、自らの使命を徹底的に分析し、WHATとWHYを良く腹に収めて、自分の行動の準拠にしなければならず、いざというとき間違いなく判断し行動できるためには、平時から良く自ら修練に励んでおく必要がある。私は今から40年前の幹部学校学生の時、寺本先生から「何の用ぞ」と自分のやっていることの目的を何処までも追求していく心の持ち方を教えていただき、大変役に立ったことを紹介しておこう。

ベトナム戦争のもう一つの大きな教訓は、シビリアンコントロールのあり方である。戦争の当時は、政治の意図にそう作戦の実施が強調され、ついには爆撃目標の一つ一つまで、ワシントンのシビリアンが決定し指示するようになり、極端な場合は、大統領が直接爆撃機の後尾射手に無線電話で命令したという信じられないような例もあったといわれる。当時はこれこそ限定戦争の特質であり、政治主導のものと新しい作戦指導のあり方などといわれたものであったが、このようなやりかたこそが、ベトナム戦争に失敗した大きな原因の一つになったのである。これはいまや定説といえよう。当時バーク大將は、「前任の指揮官でさえ決定する権限を殆ど持たず、必然的にその作戦もうまくいっていない。私は現地指揮官がその権限に全く制限を受けるべきでないというつもりはない。若干の制限は当然あり得ようが、其れは現地指揮官の裁量に委ねられない限界を示す、より一般的なPOLICY GUIDANCEであるべきである」と述べている。あとで話すように、この教訓は湾岸戦争では生かされたのである。

もっとも、アメリカでは、ベトナム戦争後でも、カーター大統領がイラン人質救出作戦で現地のヘリコプターに対して直接作戦中止を命令したとか、フォード大統領がマヤゲス号事件のとき旋回中のA-7に警告のための射撃を直接命令したとかの例があり、またラムズフェルド国防長官がペンタゴンのマイクロフォンを使いベイルートにおける海軍のボートの運動を指令中、突然港内を熟知している若い士官が、YOU CAN NOT DO THAT!と叫んだという話がある。長官の指示したコースは、低潮時浅瀬となる所に向かっていたのである。この問題については後でまた触れるが、C4Iが進歩し、現地と上級司令部や中央がほとんど即座に同じ情報を知るようになり、しかも通信が迅速になるほど、中央でしかもシビリアンが細部まで直接握って指示したがる傾向のあることは、注意を要することと思う。こういった例をみても、日本でことが起こった場合果たしてどうなるのか、大変心配である。局に当たる人は、よほど腹を決めておく必要があるのではなかろうか。

ベトナム戦争で印象の深いことをもう一つあげると、米陸軍の墮落とそれからの立ち直りである。1969年頃米陸軍の一部では、指揮者不在、任務無視、ルール無視、イカサマの報告、兵員の中の積もり積もった悪習など、ベトナム戦争によってすっかり墮落してしまった隊風が、はびこっていたそうである。それは基本的には、米国内で反戦運動が激化し、それが前線に反映して、戦意を喪失したことにあるわ

けであるが、湾岸戦争の前線最高指揮官であったシュワルツコフ将軍は、次の二つの実状を原因としてあげている。一つは将校の立身出世主義、「当時中佐から大佐に進級したければ、ベトナムで大隊長をきちんと勤め上げるだけでよかった。きちんと勤め上げるとは、そこそこの勤務評定で無事生還するということ、大隊長は6ヶ月交代制であり、できるだけ多くの中佐の切符を切ってやるようになっていた。だがこれは同時に、資格もない多くの将校が兵の生命を預かるということでもあった。上級司令部で忠勤を励んだ参謀をご褒美として大隊長に任命することは、ごく当たり前に行われていた。指揮官としての任期が僅かだから、自分の無能さの尻拭いをせずにすむ。かれの失敗はそのまま次の指揮官まで持ち越されてしまう」

もう一つは、兵員の実状。「軍の方針で、ベトナムへの派遣期間は一年間に限っているため、常にホヤホヤの新兵が流れ込み、ベテランが流出していた。ホヤホヤ組は来るや否や、いわゆる歴戦の古兵の教訓というものを見たり聞いたりするのだが、これが全部いかさまで実体は積もり詰まった悪習にすぎなかった。『基礎訓練で仕込まれた戯言など全部忘れてしまえ、ここではかくかくしかじか——要領よくやれ、これこそ本当のやり方だ』という具合に、悪知恵をつける手合いがはびこっていた」

こういった墮落した隊風を立ち直らしたのも、いかにもアメリカらしいやり方と思う。そのきっかけとなったのが、1970年陸軍参謀総長が陸軍大学校に命じて作成させた調査報告書である。これは、ほとんど全員がベトナムでの経験がある450人の将校について、内密に調査した結果を報告したもので、墮落した恩賞制度によって利己主義的行為が見逃されたこと、己が出世のために部下を犠牲にし、事実を歪曲する無能な指揮官が容認されていることなどを指摘し、さらに無意味な統計数字に対する執着ぶりを批判したものであった。特にベトナムにおける敵死体数については、司令部が敵死体数を増やせと圧力をかけるあまり、水増し報告をしたことを認めた士官が多数あったということである。この報告書の特徴は、回答者があえて外部の財政的、政治的、社会的あるいは管理面からの影響にその原因を求めて逃げることをせず、またベトナム戦争に対する民衆の反応や陸軍の急激な拡張などを理由とせず、陸軍が自らこの墮落を招いたことを認め、「陸軍のTOPから責任をとらねばならない」としたことにある。そしてこの報告書を受けて、陸軍は、そのドクトリンの構造、リーダーシップ、倫理的な風土から訓練法や戦闘法に至るまで、基本から考え直す訓練教義司令部を作り、最適任者を配して全軍の刷新を図り、これに成功したのであった。つまり墮落はしたが、見事な自浄作用が働いたということである。このことは日本の旧軍や今日の政、官、財各界の状況と比べてみると、大変考えさせられるのである。組織に自浄作用が働く限り、その組織は健全といえよう。そして自ら正しいと信ずる意見は率直に述べることのできる雰囲気、それを採り上げて検討し反省改善の資とする上司の雅量、これらこそその自浄作用の、また組織の健全な進歩発展の基盤となるものと思ひ、海上自衛隊にこのような隊風が長く継承されることを祈るのである。

次にこのベトナム戦争の教訓の活用ということでも関連の深い湾岸戦争に触れてみたい。1991年の湾岸戦争は未だに皆さんの記憶に新しいと思う。あの戦争で示された精密兵器の素晴らしさ、その背後の高度の電子戦、そして茶の間まで持ち込まれた戦況のブリーフィングなどは、現代戦の一側面を如実に示してくれた。この戦争を詳細に研究すれば、政戦略の関係、国民与論の結集、連合諸国間の調整と協力、などを始め戦術面から後方支援、広報のあり方など多くの教訓を学べること

と思う。つまみ食いになるが、私の感じたところの一端を紹介してみよう。

\* ベトナム戦争の教訓の適用

二次大戦でも日本軍は戦訓を学ぶことが遅く、米軍の迅速な戦訓への対応と比べ、顕著な差異があった。この湾岸戦争でも次のような点は、よくベトナム戦争の教訓を学んだように思われる。

・ 武力行使についての国内国際世論の十分な支持の取り付け

・ 大統領や国防長官は明確な戦争目的を定めるとともに、作戦の詳細は軍当局に委ねる。―――さきに申したPOLICY GUIDANCEによるシビリアンコントロールは、この戦争では、うまく適用されたようである。もっともシュワルツコフ回想録によると、彼は不十分な兵力で攻撃を命じられることを最も恐れており、それを未然に防ぐためパウエルJCS議長を通して大きな努力を払ったようである。またこういう例も記している。チェイニー国防長官は、攻撃作戦案を思いつき統合参謀本部の参謀にまとめさせて、大統領に提案した、これはクウェイトから500マイルはなれたイラク西端部のミサイル基地に空挺作戦を行うというもので、兵站面で支援不可能の最低の計画であった。JCSの若い立身出世主義の参謀連中は、長官に対し口答えできず、反論は自分の司令部でやらねばならなかった、というのである。そして「これまでのところベトナム戦争の時とは違って、指揮系統は然るべく機能していた。大統領は大統領らしく振る舞い、国防長官は軍事政策に集中し、JCS議長は、CIVILと軍双方の指導部の間を取り持つ推進役となり、方面軍の指揮官としての私は、任務遂行の全権を与えられている。だが、ここにいたって、チェイニー国防長官はいままで何人かの国防長官にみられた現象、つまり軍人の頭にたったシビリアンがつい政策の決定のみに満足していられなくなり、自ら將軍連中の鼻を明かす將軍になりたがる現象―――に感染してしまったのではあるまいか」と結んでいる。

ベトナム戦争の教訓を学んだことに戻ろう。

・ 自軍の損害を極小化するためあらゆる努力を尽くしたこと。

・ 兵力の逐次使用をさげ、十分な兵力を集中して一気に敵を撃破すること。

この教訓の活用ということは、我々の平時勤務や日常生活においても十分適用できるものであり、またそういった習性を養っておくことは、有事に大きく役に立つと思う。みなさんには、旧日本軍の轍を踏んでももらいたくないものである。

\* 次に私の感銘の深かったことは、アラブとの協同であり、欧米の軍隊とアラブの軍隊が肩を並べるといふ史上稀な寄り合い所帯をうまく纏め上げ勝利に導いたことである。二三の例を見てみよう。

・ 聖地メッカのあるサウジアラビアに欧米の兵士50万余が駐留するということは、文化的大事件であった。例えば非番になった婦人兵が、肩に突撃銃を吊ったまま、商店をひやかしに出かける姿は、驚きの的となった。また借りた倉庫で医薬品の荷下ろしをやっている婦人兵が、作業服を脱ぎTシャツ姿になると、女性が公衆の面前で脱衣したとの怒りの声が殺到した。駐留兵を慰問するため、アラコム従業員とその家族のアマチュアショウがCNNで放送されたが、これはサウジ内で初めてラインダンスがテレビで放送されるという大事件となった。こういった問題に対し米軍は、セックス雑誌の禁止、宗教的儀式や礼拝を目立たぬように行う、宗教的シンボルは掲げない、宣伝の中継は差し控えるなどの対策をとった。シュワルツコフは言う、「文化的紛争が、我々の任務を阻害するような事態にならずに収まったのは、サウジ側、米側双方のお手柄だった。米軍の若い男女兵士たちは、めいめい、

主人役を勤めてくれるサウジの人々の習慣を尊重しなければならぬという義務を聡明にもすぐ理解してくれ、サウジの人々はまたアメリカ人が彼らの恐れたセックス狂で酒や麻薬常習の無神論者ではないことを知り、大部分が助っ人にきた友人として、我々を扱うようになったのである」と。

この異文化の尊重と理解ということは、世界の狭くなった今日、ますます重要なことであり、連合作戦成功のため必須の鍵となるものといえよう。単一民族、単一文化で長年育った日本人は決してこれが得意ではないのではないのか。そして強きを挫き、弱きを助けるとはまさに逆に、相手が強いと見るとご無理ごもつとも、弱いとなると居丈高になる傾向が、日本人にないとは言えないのを大変残念に思う。戦前の植民政策の失敗や現在の自虐史観と謝罪外交等は、まさにその現れであり、我々自身よほど自らを戒める必要があるのではなからうか。

・クエート解放の先陣は、アラブ軍に委ねた。（実際は米軍の力であったが、表にはアラブをたてて面子を与えた）

・イラク領内に侵攻するのは、欧米の軍隊のみとし、アラブ軍は加えないことにした。

湾岸戦争についての三番目の感銘は、軍事技術の進歩と人的要素ということである。軍事技術の格差が、勝敗に致命的な影響を与えることが、この戦争であらためて確認され、またC4Iの進歩が指揮や管理のあり方を大きく変えたことが明らかになったことは、今更いうまでもあるまい。そうではあるが、これらを開発し、生産し、整備し、運用するのはあくまで人間であり、コンピュータ化し、機械化し、省力化が図られるほど、残った人間の役割と重要性は増大するのではなからうか。

これは湾岸戦争の少し前であるが、1988年2月のNIPに、当時のCNOであったADM. TROSTが次のように書いている。

「史上指揮統率上の最大のCHALLENGEは、TOPにある人々の持っているPICTUREと、現場にあるもののみが得ることのできる詳細な知識を調和させる必要性であった。すべてのリーダーは意識的または無意識的に、実在するこのGAPに大きな関心を持ったものである。彼らは、実際には混迷している問題が、遠くから見たときにはいかにも整然と纏まっているように思われ勝ちであるが、それは実際の戦闘推移の実状を示すものではあり得ないということを知っていた。かつては賢明なリーダーは、自ら現場に行って実状を見たものである。

今や史上初めて我々はDATA LINKがREALITYを伝え、COMMAND AND CONTROLがLEADERSHIPに代わることが出来るようになったと考えるように条件付けられている。一般社会では、多くの人々が人生を様式化されたVIDEO GAMEと見なしている。そのGAMEはすべての行動が予測でき、すべてのパラメーターに矛盾がなく、一切の苦痛も艱難辛苦もなく、電子的働きだけのある眩いほど明るいものだ。我々の仕事でそれに相当する見方は、海戦を機械的に考え、Leadershipの存在する余地が無くなったとするものである。このような考え方は全く間違っている。

指揮官がその情報源から遠く離れて、DISPLAYの端末に座り、ボタンを押して秩序正しく相手をやっつけるという考えは馬鹿げている。作戦の状況はそのように秩序整然としていない。DATA LINKはそんなに包括的でもなく、信頼性のあるものでもない。苦痛のない戦闘はなく、結果に対しては必ず責任を負わなければならない。そしてマシンは意志の戦いで決定を下すものではなくて、それこそ人間のやることである」。TROSTはこう論じて、今や従来以上に戦闘における

成功は、消耗の最後の段階でなお軍隊を鼓舞できる指揮官の能力にかかっており、Leadershipは技術によって征服されたのではなく、血の通った人間によって鼓舞されるべきものであると述べている。

確かに技術の進歩は重要な要素であり、我々はこれを全幅活用するよう努めなければならないが、人間の価値と役割がそれだけ減ったわけでは全くないのである。その人間というものは、負傷、病気、疲労、恐怖、飢え、ストレス、驚き、混乱などの厳しい状況には最も弱いものである。この弱い人間が、極端な精神的、肉体的ストレスのもと、それぞれの配置において最善の努力を尽くし、その責めを果たして初めて戦闘には勝てるものであり、そのような統率の出来る指揮官が戦闘に勝つための不可欠の要件である。これは私の経験と戦史の研究を通じての結論であるが、どんなに技術が進歩しても変わることはないと確信する。

この人間的要素の差が最もはっきり示されたのが、1982年のフォークランド紛争である。この戦争は、英国の軍事的PROFESSIONALISMによって決したといわれるが、伝統の価値とか長く平和が続いた軍隊の陥り易い落とし穴など、現在の海上自衛隊にとっても十分考えさせられる問題を含んでいると思う。

まず英軍の状況を見てみよう。長期の演習が終わってやっと母港に帰り、これからイースターの休暇に出ようという矢先、艦隊は突然出撃を命じられた。それも行く先は英本国の彼方7000マイル、冬の南大西洋、何時帰れるのか見当もつかない。事実長い艦はそれから166日も海上にあって行動を継続し、98日も陸影を見なかった。こういう状況で、士気旺盛、任務を完遂した艦隊乗員の意気込みはさすが英海軍と思わせられる。さて海上自衛隊で同じ状況に出会ったとしたら、果たしてどうであろうか。潜水艦部隊は、平素から単独長期の行動に慣れていると思うが、私が護衛艦隊司令官の当時、「あきづき」を率いて約一月行動した後、宿毛湾から横須賀に帰りつつあった時のことを思い出す。潮岬を過ぎた頃、硫黄島で航空事故が発生したことを知り、直ちに航空救難に駆けつけたのであったが、そのとき明日は母港ということで、浮き立っていた艦内の空気が一瞬のうちにずーんと沈み込んだことを肌で感じたのであった。これが7000マイルの彼方、何時帰れるか見当も付かないということだったらどうだったろうか、と考えさせられるのである。

海兵隊や陸軍も約40日の洋上行動、そのなかには荒天の日も少なくなかったが、その後を上陸作戦を決行し、困難な地形や厳しい気候を克服して、よく戦力を発揮し、作戦目的を達成した。ハリヤーやヘリの活動もまた見事であった。いずれも立派に英軍の伝統を発揮したと言えよう。顕著な例を二三紹介しよう。

フリゲートAUGONANTは、上陸船団揚陸泊地の援護にあたり、八の字哨戒を行っていたところ、ちょうど陸岸に向かうレグにあったとき敵機の奇襲を受け、爆弾命中、舵は故障し、後進も不可能になった。哨戒長の中尉は、自ら前甲板に走り、水兵2名を集め投錨に成功、辛うじて座礁を免れた。わが護衛艦の哨戒長もこれぐらいは出来ると言いたいところだが、さてどんなものでしょうか。

AUGONANTには、このとき二発命中したのであるが、いずれも不発で一弾は前部に命中、SEA CATが爆発して火災と浸水を起こし、一弾は機械室と缶室の間に命中して機械室に火災を起こし、浸水を招いた。この不発弾処理も大変であった。機械室の一弾はまもなく撤去できたが、前部弾薬庫に入った一弾は、ディーゼル油が沁みて、そのまま信管を外すことも、通常のハッチを使って運び出すこともできなかった。やむを得ず船体を切断して、爆弾を運び出す通路を造り、1週間かかってやっと処置できた。

艦長のレイマン大佐は、N I Pに次のように寄稿している。「艦内の士気は、状況が甚だ悪いように思われるときでさえ、極めて高かった。おそらく歴史的センスも役に立ったと思われる。乗員はすべて1942年に今の自分たちよりずっとひどい損害を受け、それに耐え抜いた先代のAUGONANTのことをよく知っていた。どんなことが起こっても、艦内には、逆境によく耐え、ユーモアを失わない水兵の伝統が溢れていた」。艦長の言うこの空気は、この艦だけではなく、英艦隊の一般的空気であったと見てよいのではないか。

駆逐艦GLASGOWは5月12日僚艦BRILLIANTとともに主隊から分派され、ポートスタンレー砲撃を行い、主隊に復帰中敵機の攻撃を受け、1000ポンド爆弾1発中部に命中、不発弾であったが、補機室上部を貫通、ガスタービンの吸気用高圧空気管等を破壊、舷側から飛び出して破孔を生じた。この被害に対し、GLASGOWは悪天候の中、浸水と戦いつつ、長時間かけて溶接に成功、15日破孔の修理を完成した。そして主機の使えるのは、不安の多い1機だけ、一軸はAUTOMATIC SPEED CONTROLが故障し手動、という状況で、強風のなか曳航給油を行っている。

ヘリの運用は、終始積極的で、夜間、低雲、狭視界、強風といった悪条件下、SAS支援のため、5月1日から18日までの間、12夜に26回の飛行を行い、全て成功した。5月9日、アルゼンチンのスパイトロール船NARWELを捕獲した際には、航続力の不足したSEA KING1機は、途中まで迎えに来たDDGと会合したが、空中給油が出来ないため、LYNXサイズの甲板に着艦（ローターブレードと駆逐艦ハンガーとのクリアランスは3フィート）し、給油後同じく困難な発艦に成功した。

シーハリアーも見事な活躍をしたが、これを支援する整備関係者の努力も大変なもので、12機を対象とする要員しかいなかったにもかかわらず、19機以上を維持し、毎日作戦開始時に1機以上、作戦終了時に4機以上がDOWNになるときは少なかった。

一方アルゼンチンの方は、一部のパイロットの損害を省みない勇敢な攻撃はあったものの、そのほかは陸軍も海軍もまことに消極的で、その士気と練度の低さは英軍と対照的であった。顕著な例を紹介してみよう。

最も目に付くのは警戒見張り心の欠如である。

5月2日、英SSNCONQUERORが、アルゼンチン巡洋艦GENERAL BELGRANOの左艦首1400ヤードから、1932年以来使用してきたMK8空気魚雷3本を発射し2本命中撃沈した。このときDD2隻を伴って10ノットで航行していたア艦隊は、潜水艦の探知はもちろん、雷跡さえ発見したものは一人もなく、全くの奇襲となった。ダメコンの準備も悪く、艦内閉鎖が不十分なため、火災の熱波が忽ち全艦に広がり、補助発電機も起動せず、為すすべもないまま総員離艦となった。30人乗り30個のLIFERAFTに移乗するのに30分を要し、移乗後15分で左に横転艦首から沈没した。2隻の駆逐艦は、対潜捜索を行い爆雷を時々落としたが、CONQUERORが脅威を感じずほど接近せず、潜水艦は静かに現場を離脱した。駆逐艦は2時間後沈没現場に戻ったが、悪天候と暗闇のため何も認めず、ラフトが発見されたのは沈没後24時間、生存者全員の収容までには、さらに丸1日を要した。

もっとひどい例がある。英軍が陸兵を揚陸したとき、揚陸部隊は5月20日深夜、フォークランド海峡北口を通過したのであるが、視界が良かったにもかかわらず、



幅3ないし4マイルの海峡入り口を通る11隻（大艦を含む）の英軍部隊を、海峡両側のア軍見張り所はいずれも発見しなかった。さらに、見張り所から2マイルの泊地に投錨した船団の投錨音も、見張り所襲撃のためのヘリの発着音も聞かなかつた、聞いても無視した。この見張り所を占領後、英軍はここに夜間の暗視装置、80ミリ迫撃砲、106ミリ無反動砲などが装備されていたことを発見した。このア軍の信じられぬような怠慢がなければ、英軍も大いに悩まされたであろう。

一部のパイロットは、余りにも突っ込みすぎて、安全装置が解除せず不発弾が多かったほど、勇敢であったが、それは一握りの人たちで、これらのパイロットが消耗してしまうと、忽ち戦果は挙がらなくなった。英軍上陸後5日間の出撃167ソーチーのうち、フォークランド到達前に引き返したものが61（36%）実際に戦闘したものは80（48%）ということで、整備の問題もあったが、それだけではないと思われる。また重要な目標を求めてこれを攻撃することをしないで、最も近い、最も攻撃し易い目標に向かったため、英軍の作戦に致命的な影響を与えることは出来なかった。

みなさんの関心の深い潜水艦については、すでによくご承知と思う。英国はこの紛争を通じて原子力潜水艦5隻、在来型1隻を展開、早期にフォークランドの封鎖を確立して敵の増援を阻止し、またGENERAL BELGRANOの撃沈によって、アルゼンチン水上部隊をして極度に洋上行動を避けしめ、敵水上部隊を事実上無力化した。これらの行動については、CONQUERORが4月上旬南ジョージアの占領を支援し、5月2日ア巡を撃沈した以外には、全く報じられていない。少なくとも1隻は、空母の付近でソーナーピケットの役割を果たしたであろうと推測されており、ありそうなことと思う。在来型潜水艦の用法も興味が深い、全くわからない。

アルゼンチンの方は、旧米GUPPY級2隻と西独設計（アルゼンチンで組み立て）2隻の潜水艦を持っていたが、GUPPY級の1隻は、アルゼンチンのフォークランド侵攻に際し、フログマン10人を輸送、その後南ジョージア島への補給品輸送にあたり、揚陸して出港しようとしたとき、英ヘリの攻撃を受け損傷、擱座して放棄された。もう1隻は、潜航不能の状態で、秘匿し偽装した。

西独設計のものは、20ノット、30日の滞洋能力、小型静粛で、フォークランド周辺の比較的浅い海面での使用に適しており、フォークランド北方に自由発射海域を与えられた。1隻は約1ヶ月哨戒し敵と接触しなかった後、5月11日、フォークランド海峡周辺で、夜間掃討のため行動中の英フリゲート艦2隻と会敵、理想的な攻撃位置を占めたが、FIRE CONTROL COMPUTERが故障し、全データはソーナーにより手動で5000ヤードから1本発射、2.5分後ワイヤー切断、その2、3分後小爆発音を聞いた、という。英フリゲートの方では全く気が付かなかったが、曳航中のTORPEDO DECOYを後で揚収したとき大変痛んでいたという。当時は海底に接触したためと考えられたが、この魚雷が命中した可能性もあろう。この潜水艦は、もう一度発射するための解法を得ることが出来ず、また帰投後再度出撃する機会もなかった。もう1隻は出撃後日ならずして故障のため帰投、そのままとなった。

こうしてアルゼンチンは4隻の潜水艦を持ち、しかも英水上部隊の行動が局地に拘束され、水中状態も対潜警戒が困難という絶好の機会に恵まれながら、英側に対潜努力を強要した以外に見るべき成果を全く上げ得なかったのである。そしてその原因は、性能上の限界や用法もさることながら、むしろ乗員の練度や整備能力の未熟

さなどにあるように思われるのであって、これがPROFESSIONALISMの問題である。

そこでなぜアルゼンチンがそうであったかを深く考えておく必要がある。この戦争の前、アルゼンチンを訪問した海上自衛隊の高官も練習艦隊も異口同音に、ア海軍の軍紀厳正で精強なことを賞賛したものであった。にもかかわらず、蓋を開けるとこの通りであった。アルゼンチンは、20世紀になってから一度も戦闘をしたことが無く、長期の平和が続くに従って、軍隊が一部高級軍人の政治力発揮のための道具となり果てていたのである。そして、軍隊そのものも官僚化し、形式化して、本質が見失われ、表面のみが飾られた。しかもその欠陥が自覚されず、自浄作用もなく、いざことあるとき、敵によって暴露されたものと思う。このうち前者は今日の日本ではありそうもないが、後者については、我が身を戒めるよすがにしてほしいものである。

冷戦が終わって、自衛隊の任務も複雑となり多様化したことは事実であるが、その本質すなわち侵略に対し我が国を守る任務を与えられた、国の唯一の武力集団であり、国家国民を守る最後の砦であるということには、いささかの変わりもないと信じる。

ところでフォークランド戦争でもう一つ感銘したことは、英国のシビリアンコントロールのあり方である。英国でも1956年の第二次中東戦争におけるスエズ侵攻に際し、当時のイーデン首相は、英任務部隊指揮官に対し、矛盾する命令を次々と発し細部までコントロールしたのであるが、これが上陸作戦の下手際ひいては作戦全体の失敗につながったという反省もあり、サッチャー首相は、戦闘を直接指導する事は一切避け、各指揮官がその範囲内で作戦を遂行すべき明確なガイドラインを設けた。それは、1. 損害を最小限度にとどめること。2. アルゼンチン本土の航空基地を爆撃しないこと。3. 上陸侵攻のタイミングは政治的に決定される、であったといわれる。このように政治指針が明確で動揺せず、しかも戦術レベルには介入しなかったことは、勝利を収めた重要な要素であると思う。

このほかフォークランド戦争からは、紛争の未然防止、危機管理、戦争指導、政略の関係、各種作戦、後方支援、広報等各般にわたり貴重な教訓が学べると思うので、興味ある人の研究を奨めたい。私も未熟な研究を昭和59年から60年にわたり「波濤」に投稿しておいた。

最後に日米関係について一言触れておこう。日本がバブルの最中大変景気の良いときは、”NOといえる日本”などの勇ましい議論が多かった。最近のように経済不振、金融不安などと言われ、何かと内政干渉めいた文句まで、米国から突きつけられると、ご無理ごもつともという卑屈な反面、これに反発し、日本が乗っ取られてしまうような議論も出ている。私は経済のことは良く分からないが、いずれの国も自らの国益を第一に考えて行動するのは、当たり前のことと思う。国とか民族とかを無視して、すぐ世界とか人類とか言うのは、日本の戦後民主主義者や観念的平和論者だけであろう。そういう人たちが、マスコミや論壇の主流を握って来た現代日本では、多少でもナショナリスチックな主張は悪いことではないと思うが、健全なナショナリズムという立場ではなく、徒にその反米的なところだけが強調されて伝えられるのはどうかと思っている。

日本のおかれた地政学的地位は、明治以来少しも変わっていない。北にロシア、西に中国、東にアメリカという大国を控え、南に東南アジア、豪州の資源地帯があり、北西から朝鮮半島が迫っているという地理的条件は、変えようがない。そしてこれ

らの諸国とどのような関係を持つかということが明治以来国の存亡に関する基本問題であったし、今後の防衛だけでなく、発展や繁栄も左右する重要な要素である。資源に乏しく、万一の場合、最終的勝利を決する決め手、殊に核抑止力を持たない日本としては、周囲の大国の一つと運命共同体的な同盟を結び、その支援のもとに他国との事態を未然に防止する以外に方策はないと思う。非武装中立、単独防衛、いずれも観念的机上の空論に過ぎない。そして、その一国が、予見しうる限りアメリカしかいないということも、好き嫌いは別として、国民生活の維持発展上やむを得ない現実と思う。

そのアメリカは、日本にとり決してつきあいやすい相手ではなく、独善的で、NO. 1でなければ承知せず、少しでも相手が勝ると見れば、強引にねじ伏せにかかる我が儘ものといえよう。このアメリカとどうつきあっていくかが問題である。

山梨大将がかって海幹校でお話しされた中に、次のような一節がある。「イギリスの外交官、ジェームス・プライスは大学者で、アメリカ憲法に関する著作もある有名な人で、また山登りの大家でもあり、来日したことがある。この人が、幣原大使に「日本は移民問題でアメリカに対してどうするか」といったのに対して、幣原さんは「うんと抗議する」といったところ、彼は「国家の運命は悠久で永遠である。アメリカに抗議して、移民問題ぐらいでアメリカと戦争するのは馬鹿げている。イギリスはどんなことがあってもアメリカと戦争はしないと国策で決まっている」と言った。

イギリスとアメリカの間に、ヘイ＝ポンスフォート条約というのがありまして、これは、パナマ運河を開くとき、イギリスとアメリカの間に、イギリス大使のポンスフォートとアメリカ国務長官ヘイとの間に出来た協定です。これはパナマ運河の通行料については、英米均等であって、特惠的でないという約束なのです。ところがいよいよ運河が出来上がってみると、そんなことはお構いなく、料金はアメリカだけうんと安くして、イギリスからはうんと金を取った。それでイギリスは早速約束違反だといって抗議をして、長い争いがあり、しかもそのプライスが大使でアメリカに抗議したのです。

アメリカは例の我が儘で、そんなことは受け付けず、まるっきり掛かり合わず横暴を極め、イギリスが幾度抗議しても、上院が承知しないのです。アメリカの上院というのは、世界でも有名な我が儘もので、横紙破りの大将です。イギリスの抗議など一蹴してしまっただけです。ところで幣原さんが「それでヘイ＝ポンスフォート条約の違反をどうした」というと、「放っておく」というのです。「歴史を調べてみると、アメリカという国は、我が儘をうんとして、相手に抗議されて改めるということをしない国で、黙って放っておくと、自然と自分で考えて自分で改める国だ」といろいろな例を引いて説明したのです。「だからあんなものを相手にするものじゃない。日本もそうした方がよい」と幣原大使にプライスが言ったという話がある。国民の面目、威信、利害に関する問題を、向こうが気が付いて直すまで黙っておるといっても、為政者として、政府として実際出来ることかどうか、私には分からないのですが、そういう説があるのです」

以上が山梨大将のお話である。英米関係はきわめて緊密であるように見えるが、これを維持するためのイギリス側の努力、忍耐の一端はこの話からも窺われる。二次大戦後の私の知っていることだけでも、英帝国を解体するために戦ったのではない」というチャーチルの悲願にもかかわらず、結局アメリカの圧力によりその意向に添って解体せざるを得なくなったこと、先に触れた1956年のスエズ出兵の際、こ

れに反対したアメリカは、ソ連の核恐喝に対し英仏を支援せず、結局英仏の撤退、イーデンの辞職、エジプトスエズ方面における英勢力（影響力）の消滅という結果になったこと、戦略核抑止力としてイギリスは爆撃機を整備し、アメリカはASMを開発してリリースするという約束で、イギリスがやっと爆撃機を整備したところ、アメリカからポーラリスの開発が成功したので、ASMは中止する、イギリスが希望するならポーラリスをリリースしてよいと通告され、せっかく多額の経費を投入して整備した3Vと称した爆撃機はムダになり、あらためてポーラリス用原潜を整備せざると得なかったことなど、煮え湯を呑まされた例に事欠かない。いわゆる同文同種、同じアングロサクソンのイギリスに対してもこうである。もちろんイギリスは、率直に反対すべきは反対し、抗議すべきは抗議して、言うべきことは言っているが、最終的に袂を分かつことはしない、やむを得ないときは、じつと忍び涙を呑んで時期を待つ、という国の基本方針が一貫しているように思う。

此の例からみても、日本が国益上少なくとも当分の間、アメリカと同盟関係を維持強化するというのであれば、それ相応の覚悟を決めておかねばならない。さらに、アメリカに日本の言い分を尊重させるに足るだけの共通の目的に対する貢献を必要とする。日本の現状を見ると、新しいガイドラインの扱い方一つを見ても、政治家や国民がどこまで真剣に考えているか、不安に耐えない。せめて制服の皆さんだけでもよく考えて欲しいものである。

ゴタゴタと、テーマばかりを並べて意の尽くせない話となったが、時間も大分経過したのでこの辺で終わろう。

最近私の嬉しく思ったことは、潜水艦出身の幹部が、海幕の主要部課長を始め、地方隊、学校等の要職で大いに活躍して居られることである。そんなことは至極当然で、少しも不思議ではないが、その当然のことが、私の在職中には、人の量と質の両面からなかなか難しく、早く水上部隊や航空部隊なみにしたいと願ったことであつた。

技術の進歩につれ、学ぶべきこと、やるべきことはますます増え、その一方シーマンシップや”KNOW YOUR BOAT”の基本は少しも緩めてはならず、今の人々は本当に大変だと思う。どうか、潜水艦の基本にしっかりと足を着けるとともに、積極的に新しい技術や戦術に挑戦し、さらには視野を大きく開いて、海上自衛隊全般、統合作戦、防衛戦略や政策、政治との関係などを良く理解し、ますます発展されんことを祈って已まない。

神と軍隊ほど平時は忘れ去られ、事が起こったとき責めを問われるものはないといわれる。今日の状況を見ても、自衛隊はなお苦難の道を歩むことと覚悟せねばなるまい。そして万一事ある時安んじて難に赴き得るよう、日頃全身全霊をかけて修練に励みつつ、しかもそれが役に立つ日のないことを祈るのが、自衛官の立場である。特に隠密性を生命とする潜水艦乗員の努力は、平素国民の目に触れることはなく、その支援激励を感じる機会も少ない。随分引き合わない仕事とも言えようが、福沢諭吉曰く「世の中で一番尊い事は、人のために奉仕して決して恩に着せないことである」と。この引き合わない仕事こそ、男の一生をかけて悔いのないものであることを確信する。

皆さんのご自愛とご活躍を祈る。